

東日本大震災緊急・復興支援 2年目の軌跡

公益財団法人国際開発救援財団（FIDR「ファイダー」）は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地において、被災地の状況を的確にとらえ、本当に必要とされる支援を最適なタイミングで行っています。

震災発生から2年目を迎え、被災地への支援は、緊急救援から復興を実現するためのものへと移ってきました。FIDRは多くの法人、個人の皆様からのご協力をいただき、岩手県大槌町と山田町を中心に、地場産業の再建による経済と雇用の回復や自治会を基盤とするコミュニティの強化に取り組んできました。同時に、岩手・宮城県沿岸部の中高生の部活動やボランティア活動の支援を継続してまいりました。この報告書は、2012年度のFIDRの主な活動とその成果をお伝えします。

=復興支援ハイライト 1=

定置網漁の再開に向けて(大槌町)



9月5日に行われた定置網漁の
初水揚げの様子（岩手県大槌町）

定置網漁は、大槌町の漁業の主力。震災で漁船や設備が失われ、操業の再開は難しい状況でした。

2012年、大槌町で基幹産業である水産業の復興支援を開始したFIDRは、まず、定置網漁を再開させるために、新おおつち漁業協同組合に対し、中古の定置網船3隻の修繕およびライフジャケット等の資機材の購入を支援しました。

9月5日、2年ぶりに本格的な定置網漁の水揚げが行われました。

当日は、早朝4時過ぎに漁師20人が出漁。3トンのサバやショッコ（ブリの幼魚）を水揚げしました。初ゼリということで、魚は通常の1.5倍以上の値で取引され、幸先の良いスタートとなりました。

碓川豊町長は「浜が活気づく」と陸も活気づく。FIDRの支援に感謝したい。今日揚げた魚を支援してくださった皆さんに食べてもらいたい」と喜びを語ってくださいました。

FIDRは引き続き、新定置網船（1隻）の造船ならびに定置網（4網）の購入を支援します。新船「第一久美愛丸」（アルミ船19トン）の起工式は2012年1月17日に執り行われ、7月には完成する予定です。昨年修繕し操業している船に比べ大きく、アルミ船で軽量であることから、作業の効率化や燃料費の削減が期待されます。

「FIDRの支援に感謝します。まさに天の助けです。これからも漁に励みます」「支援なしでは新船は造れませんでした。去年は三陸沿岸全体に不漁でしたが、今年は大漁を願っています」

新船の完成後は、定置網漁の操業も1か所から3か所に広がる予定で、町の水産業の復興と発展に寄与することとなります。

この活動は「大槌町復興支援募金」により実施しています。

=復興支援ハイライト 2=

山田町の魅力を伝える情報誌を発刊



(写真上) 報道関係者を前に情報誌の創刊号を掲げる FIDR 薄木職員＝右と山田町社会福祉協議会職員（当時）。

(写真中) プロの写真家が町の景観や人々、名産品を撮影。

(写真下) 情報誌に掲載された「かき小屋」。山田湾の海の幸を美味しく食べられる場所や名産品や町の人、観光名所を魅力的に伝えます。

山田町情報誌「やまだ物語／観光やまだ」（発行：山田町観光協会）が、2012年8月11日に創刊されました。

コンセプトは、観光を軸とした「山田町、復興への姿」。町内外へ向け発信することで、既存の観光客を呼び戻すだけでなく、これまで支援をしてきた方々や、これから支援を考えている方々を山田町と繋ぎます。

第2号は11月11日に、第3号は2013年3月11日に発行。「山田の海の幸」や「復興に向けて歩む町の人々」などを紹介しています。

本誌は、2012年2月にFIDRからの提案により企画されました。4月には、観光協会、役場、道の駅やまだや商工会等と「山田町情報誌編集委員会」を立ち上げ、発行準備を進めました。

FIDRが重視したのは、町の魅力や名産品の美味しさを、視覚的に伝えること。被災後に生産を再開した地元企業は、商品を魅力的にアピールするまで手が回らず、商品カタログの写真も購買意欲を掻き立てるに足る構図や色合いにはなっていなかったからです。そこでFIDRはプロのカメラマンに依頼し、商品や漁師さんなどを撮影してもらいました。写真は同誌に満載されたほか、町の観光協会のウェブサイトにも掲載され、山田町の魅力発信に効果を発揮しています。

*同誌は、県内各地の観光協会や道の駅、県外の岩手県アンテナショップ（いわて銀河プラザ・東京、きた東北発見プラザ jengo・大阪など）で配布。FIDRのウェブサイトからもダウンロードできます。

町の人たちの暮らしと自治を支える



FIDR は 2011 年 9 月より、山田町の仮設住宅団地の住民の顔合わせにはじまり、自治会の形成や自治会活動の支援を続けてきました。異なる地区に住んでいた住民が混在する仮設住宅において、安心安全な暮らしを取り戻すためには、住民同士がつながり支え合う「コミュニティの再構築」が必要と考えたからです。

同年秋に自治会が結成された、関谷仮設住宅団地。異なる地区出身の約 80 世帯が入居しており「新しいコミュニティをつくろう」と住民の意識が一致しました。以後自治会では、住民が集うイベントや防犯パトロールなど、住民の交流や安心安全を保つための活動が続けられています。

2012 年 10 月に自治会が行った防災避難訓練では、FIDR が支援した“仮設住宅向け特別仕様”の簡易水道消火装置の実地訓練も行われました。防火水槽のないこの地区では、消防車による消火作業が始まるまでに時間がかかるため、住民による初期消火が重要となるためです。

80 代の方は「この辺りにも津波が来たから、避難訓練をしておかないとね」。子どもがいる方からは「避難場所の確認ができて良かった」と安堵の声が。消火装置の使い勝手の良さも実感されました。

山田町仮設住宅の方々による活動



(写真左)風除室づくりで、協働の輪

雨が入り込み困っていた仮設住宅の談話室に、住民の男性 20 人で「風除室」を手作りしました。協働作業を通じて、住民どうしの結びつきが強まりました。

※FIDR は木材等の材料を提供



(写真右)カラオケで元気に

仮設住宅団地の住民が自主的に開催する親睦の会で、FIDR はカラオケセットを無償で貸し出しています。集い楽しむことが気持ちを励まし、互いに支え合う契機となっています。



(写真下)新年を控え、仮設住宅でのお手伝い

2012 年 12 月 26 日～28 日に、FIDR スタッフ(10 名)と日本体育大学の有志の皆さん(教員 3 名、学生 28 名)が、町の全ての仮設住宅団地を訪問し、住民の方々など 355 名と正月飾りを作り、あわせて、希望者のお宅で大掃除のお手伝いや肩もみなどをしました。

=復興支援ハイライト 4=

中学・高等学校の子どもたちの笑顔を、取り戻す



部活動サポートプログラム

FIDR は 2011 年 7 月から、津波による甚大な被害を受けた中学校と高等学校に対して、「部活動用具・設備の回復」および「部活動の実施」を支援してきました。

2012 年度からは、岩手県に加え、宮城県の 5 市町にも対象範囲を拡大しました。

多くの中高生が部活動に取り組み、かけがえのない経験を得ることができるよう、必要な活動資金をサポートしています。2012 年 4 月から 2013 年 2 月末までに、33 校 249 件の支援となりました。



岩手県立釜石商工高等学校(なぎなた部)

東京から講師を招聘した講習会・練習会に参加し、技術を磨くことができました。

宮城県石巻工業高校

被災した施設の復旧が進まず、校内での練習ができないため、遠征を重ねています。



中高生ボランティアサポートプログラム

岩手県内の中学校・高等学校の生徒が、被災者への支援、被災した母校の復旧、地域の再建のために行うボランティア活動を 2011 年 7 月から支援しています。

2012 年度からは、対象地域を岩手県、宮城県、福島県の 3 県に拡大し、東北の未来を担う若いパワーを後押ししています。昨年 4 月から今年 2 月末までに、9 校 15 件のボランティア活動を支援しました。



岩手県立岩谷堂高校
陸前高田市の保育園と介護施設を訪問し、本の朗読、歌の披露などを通じた交流会を実施。写真はクリスマスカードを高齢者にプレゼントする生徒。

宮城県黒川高校 (機械科)

震災で移転を余儀なくされた方々を宮城・福島・岩手から受け入れる黒川郡。地域の夏祭りに参加し、鑄造の技術を活かしたキーホルダー作りのコーナーを開きました。



FIDR 東日本大震災緊急・復興支援活動総覧

1. 避難所生活を乗り切るための支援

宮城県・岩手県の 8 市町村（2011 年 3 月～5 月）

初動支援で宮城県塩竈市、気仙沼市、岩手県宮古市などの避難所に、食料を届けました。その次に、岩手県沿岸部各地に洗剤や石鹸、うがい薬や殺虫剤などの物資のほか、冷蔵庫等を提供しました。

2. 被災者の生活再建に向けた支援

岩手県内約 11,250 世帯へ（2011 年 4 月～2012 年 1 月）

岩手県 8 市町村の仮設住宅、民営住宅など約 7,000 戸の入居者に、炊飯器、電気ポット、掃除機、暖房器、扇風機などを提供しました。また 10 月には大槌町の町外避難者約 100 世帯へ、11 月以降は 8 市町村の在宅被災者約 4,150 世帯へ暖房機器を提供しました。

3. 子どもの笑顔を取り戻す支援

岩手県・宮城県・福島県

【仮設保育所の開設支援】（2011 年 7 月～2 年間）

津波により破壊された公立保育所の再建のため、宮古市の津軽石保育所と田老保育所（2011 年 9 月開所）、ならびに岩泉町の小本保育園（同 12 月開園）で仮設園舎の建設と備品の配備を支援しました。



田老保育所の仮設園舎

【部活動サポートプログラム】（2011 年 7 月～）

中学校と高等学校の生徒たちにとって貴重な学びと経験を得る場である部活動を復活できるよう、岩手県・宮城県沿岸部の学校で、津波により損失した部活用具の購入や修理の支援のほか、部活動の練習や大会参加にかかる費用の支援を行っています。

【中高生ボランティア・サポートプログラム】（2011 年 7 月～）

自分ができることを通じて地域の復興に貢献したいと願う中高生の思いを後押しするため、岩手県・宮城県・福島県全域の学校を対象に、被災地でのボランティア活動の実施に必要な費用を提供しています。

※このほか、岩手県大槌町において、2011 年度分の学校給食や保育所などにかかる費用を支援しました。

4. 地域の人々の命と暮らしを支える支援

岩手県山田町・大槌町（2011 年 9 月～）

【買い物支援】

山田町において、仮設住宅に暮らす住民の方々が活用できるよう 2011 年 10 月より「買い物バス」を導入し、2012 年 3 月には新車両を寄贈しました。バスは山田町社会福祉協議会が無料で運行し、住民同士の交流や情報交換、お楽しみの場としての役割も果たしています。一方大槌町では、仮設住宅団地を巡る移動販売車の運行を企画、協力企業様が 2011 年 10 月より営業しています。

【コミュニティの再構築】

仮設住宅に暮らす方々が孤立するのを防ぎ、かつての活気あるコミュニティを取り戻すため、山田町・大槌町の仮設住宅団地で顔合わせ・懇談会を開催し、仮設住宅団地の代表、班長の選出を行いました。また、住民が集う場の創出を支援し、自治会の発足へとつなげています。



顔合わせ・懇談会の様子

5. 産業復興・雇用創出のための支援

岩手県山田町・大槌町（2012 年 4 月～）

【山田町 観光復興支援】

観光を軸とする産業の立て直しに取り組んでいます。まず、山田町へ関心を向けてもらうため、町の魅力や復興の姿を情報誌などで発信し、山田町への訪問の意欲や特産品の購入に繋げるよう、側面支援しています。水産加工品などの特産品の販売促進を後押しすることも計画しており、水産業の復興とそれに伴う雇用の創出につなげることを目指します。

【大槌町 復旧復興支援】

大槌町では、基幹産業である水産業が震災により壊滅的な被害を受けました。町の漁業は漁協が運営する定置網漁が中心ですが、「新おおつち漁業協同組合」（新漁協）は、組合員のほとんどが被災したこともあり、財政基盤が弱く活動資金が乏しい状況です。そこで FIDR は漁業の復旧復興を支援することとし、新漁協が定置網および定置網漁船を購入する費用（一部）のほか、中古漁船の修繕、組合員が共同利用する各種機器・資材等を支援します。

緊急援助募金ならびに支援実績のご報告

－2011 年 3 月～2013 年 2 月－

- 緊急援助募金 996,129,307 円
（内、大槌町復旧復興支援募金 282,707,559 円）
- 支援実績 649,964,020 円
【内訳】

項目	総計
1. 避難所生活を乗り切るための支援	¥25,852,084
2. 被災者の生活再建に向けた支援	¥245,706,833
3. 子どもの笑顔を取り戻す支援	¥179,672,685
4. 地域の人々の命と暮らしを支える支援	¥34,011,744
5. 産業復興・雇用創出のための支援	¥106,085,912
山田町 観光復興支援	¥8,217,333
大槌町 復旧復興支援	¥97,868,579
6. その他	¥123,080
直接費 合計	¥591,452,338
管理費 合計	¥58,511,682
総計費 合計	¥649,964,020

FIDR 東日本大震災緊・復興支援 支援地地図 (2013 年 2 月現在)

